

瞬間と包摂

— 文化としての建築創作論 —

前田 哲男

山口県立大学附属地域共生センター

Moment and Inclusion

— Monograph on Architecture as Culture —

Tetsuo MAEDA

YPU Center for Cooperative Community Development

Abstract

Kitaro Nishida created a unique philosophy to reveal the underlying structure of the word. Based on the literature from Nishida's career, this study is an attempt to create a theory of creative architecture.

It is very important that human rights are respected and we become free. However, free desire when released may run recklessly. Nishida's philosophy overcomes the mechanical aspect of everyday life. Furthermore, his philosophy is considered an avenue to creative production.

By holding the essence of his philosophy, I consider the aim of architectural design, specifically, one which is in concordance with people's independent and free activity.

Keywords: Value creation, Architecture, Chora, Space-time, Moment, Inclusion

キーワード：価値創造、建築、場所、時空間、瞬間、包摂

1. 序

資源や土地は無限ではなく、省エネルギーや地球温暖化問題に対する関心が高まっている。そして、低炭素・循環型社会の構築を図り、持続可能で活力みなぎる地域づくりを推進していくことが、重要な課題となっている。また、少子高齢社会を迎え人口減少の時代においては、右肩上がりの経済成長が困難になり、地域社会の経営、それに関連する公共施設の建設や運営・維持管理、さらに住宅政策などにおいて、様々な課題が山積されている。長寿社会においては、たとえ重度な要介護状態となっても、住み慣れた地域で、自分らしい生活を続けられることができるように支援する「地域包括ケアシステム」の構築が求められている。このシステムを実現するためには、自助、互助、共助、公助を適切に組み合わせることでいくことになる。つまり、フォーマルケアのみならずインフォーマルサポートの充実が求められており、奪い合いではなく譲り合いが、排除よりも

包摂が、競争よりも協調が、効率よりもゆとりが、物の豊かさよりも心の豊かさが、求められていると考えられる。

建築士はたんに建築主から与えられた企画に基づいて建物を設計するだけではなく、企画段階に深く関わることもある。こうしたとき、建築士の抱いている基本的姿勢が問われる場面も多々ある。また、建物の設計であっても、それがひとつの行為であるからには、行為の目的や手段さらには行為者の世界観が問われることになる。安易な姿勢での建設企画や建築設計は、社会から批判を受ける可能性が高いと考えられる。

環境や建築の設計に携わる専門家においては、自分自身の倫理観を含めた基本的な姿勢を今一度点検し反省することが、喫緊の課題である。そしてそのためには、人間の精神を含めた現実世界の根本構造を探求し、確認する必要がある。普遍的な原則や本質を軽視し、時代の流行に振り回されることを良

しとする姿勢は、社会的な責任を放棄することに繋がっていくと考えられる。

本研究は、人間の精神と世界の根本的構造を明らかにすることを通して独自の哲学を創造した西田幾多郎（1870-1945）の文献から、建築創作論の一端を構成しようとする試みである。

2. 意識と場所

我々は、自分自身の意識を対象化し、表象として扱ひ言語を用いることによって、現在の状況に対して様々な働きかけをすることができる。このように言語を駆使して「意識される意識」を捉え、それを操作することは可能である。しかし、「意識する意識」を直接、的確に捉えることは困難である。なぜならば、「意識する意識」を意識した瞬間にそれは「意識される意識」つまり「対象化された意識」になってしまうからである。

意識とは「何ものかについての意識」であるという意識の志向性は、「意識する意識」を不問にし、「意識される意識」のことを指している概念である。事物などの客観的対象を認識するとき、確かに意識には志向性があり、意識を矢印で表現することが可能である。しかし、矢印の示す先から矢印の出発点である「意識する意識」を捉え返すことはできない。

ここで、事物を認識する瞬間である直接知覚を観察すると、基体と属性の区別、主語と述語の区別はなく、また、主観と客観の区別もないことがわかる。さらに「意識する意識」と「意識される意識」の区別もないといえる。また、一般に我々は身体と心とを分けて考えるが、事物を認識する瞬間、身体と心は一つである。そして、自分が自分のことを意識する自覚、「AはAである」という自覚において、「意識する意識」と「意識される意識」は一つである。

ところで、「AはAである」という表現を用いると、主語のAが確実に存在し固定しているかのようには思えるが、それは誤解であり、時とともに移行行く主語のAを的確に捉えることは困難である。主語のAつまり自己や自我は、絶対的なものではなく相対的であり、常に変化しており無常である。

フィヒテ（1762-1814）は意識について、意識行為となされた事とは、まさに一つの同じものである主客未分の「事行」という概念を提示しているが、意識の登場する瞬間や事物を認識する瞬間が、西田の言う「純粹経験」であり、この経験は分化されていない一つの全体である。そしてその後、一つの全体が分化発展し「意識される意識」が登場してくる。そして、この「意識される意識」については、言語を用いて的確な分析を繰り返すことができる。

しかし、「意識する意識」つまり我や自我と呼ぶことのできる実体を的確に捉えることは困難で、真

の人間存在は存在から逃れ、手の届かないところにあると表現することもできる。現象学の「ノエシス・ノエマ」、さらに記号論の「シニフィアン、シニフィエ」といった精神現象を分析する概念を、いくら駆使しても捉えられるものではない。そこで西田は「場所」という新たな概念を提案している。

「真の認識主観は私の所謂超越的场所といふ如きものでなければならぬ、すべてを包むものでなければならぬ、所謂主客の対立も之に於てあるものでなければならぬ。右の如く包摂判断の述語面が述語となって主語とならないと考へられた時、それが私の所謂場所として意識面であり、之に於てあると云ふことが知ることであると云ふのが、私が「場所」の論文に於て到達した最後の考である。」¹⁾

西田は、意識行為にみられる主語と述語の包摂判断に注目して「場所」の論理を提案し、場所においてあるということが知ることであると主張している。そして、この論理を円錐形の幾何学的イメージに重ねて構築し、「AはBである」という主語と述語の関係は、円錐形の頂点Aが底面Bに包摂されることであると考えている。

3. 自由と反省

感情が突然に襲ってきたり、欲望が意志によって制御できなかつたりする我々の精神現象を観察すると、この「意識する意識」は感情や意志と関係が深いことがわかる。この感情や意志は、人間の自由という問題や芸術活動に関連していく。ところで人間は、食欲などの生理的欲求だけで生きているわけではなく、自由と放縦とは違う。自由奔放な行動は、我々が自分自身を見失い行く方向である。そして、自由や芸術の問題は、倫理や当為の問題とも関連していく。

自分が自分自身の行為を反省するとき、行為をしていたときと同じ心の状態で反省すると、判断の誤りが登場する可能性がある。的確な反省のためには小さなこだわりから卒業し、行為をしていたときより高次のレベルに自分自身が立っていることが必要になる。さらに、人は反省している自分をも外から見るができるが、そのときには、反省していたときの心より、さらに深く広い心、境涯の高い心が必要になる。

ところで、人の心は、どこまで深められ、広げられ、高められるのであろうか。円錐形の高さを無限に高めると底面は無限に広がる。西田の描く心の円錐形は、西田の論文の中で「周辺なき円」と表現されているように、無限大の大きさを持つ。西田において、人の心は、言葉を超え無限大に広がる。体の成長には限界があるが、心の成長には限界はなく、心はどこまでも大きく、深くなると考えられている。

心の成長や人間性の豊かさの追求には限界がない。しかし、心の奥底である普遍的な人間性を言葉で表現することは困難であり、西田の「場所」の論理は、人間の境涯や心の豊かさを見つめ、言葉で定義づけをすることのできない真実や本質、つまり、言葉を越えたところの真実や本質を見ようとする試みであると考えられる。言葉を破り、形なきものの形を見、声なきものの声を聞こうとする試みである。

ところで、自然現象や社会現象、さらに他者の心や自身の心を知り理解することと、未来へ向けて選択し行動していくこととは世界が違う。「であること」が直接「なすべきこと」にはつながらない。「なすべきこと」を的確に見つけるためには、境涯の大きさや広さが必要になる。境涯の狭い自己中心的な欲望に基づく奪い合いの行為においては、普遍的な倫理の世界は登場してこない。

境涯の狭い自己中心的な欲望を突き破り、多様な人々の多様な世界を肯定し、尊重し、包摂することによって、普遍的な倫理の世界を創造していくことができると考えられる。

4. 二項対立と普遍性

建築設計の対象として、もっとも人間に近い領域である住宅を選んだ篠原一男(1925-2006)に関する評論で、多木浩二(1928-2011)はつぎのように語っている。

「ひとくちに空間といってもスケールによってちがった原理をもつふたつの極にわかれてしまう。そのひとつが、人間の内在的な衝動や直観につながるものであり、もうひとつが、きわめて抽象的な記号論のレベルであつかわれるものである。篠原一男は後者をドライな構造とよび、前者をウェットな空間とよんでいるが、人間の存在する世界全体は、このふたつのものによる複合的な構造をもつことはいまでもない。」²⁾

ここで、「ドライ-ウェット」、「クール-ウォーム」、「乾燥した-湿った」、「冷たい-温かい」という表現は、人間の性格や人間関係、さらに社会のありようを表現する二対の言葉としてしばしば利用される。たとえば、「ドライな知性を持った人々が作る冷たい社会」といった表現がある。「ドライ、クール、乾燥した、冷たい」といった語句は知性に、感情は「ウェット、ウォーム、湿った、温かい」といった語句に結びつけられる傾向がある。

また、建物は人間が個人または集団で利用するものであり、そのために、建物の性質やその価値を表現するとき、「ウェットではなくドライな空間」という記述などが見られる。そして、この記述に見られるように、こうした二項対立に基づいて、その一方を肯定する主張が登場することがある。しか

し、まだ知られていない空間や環境の創造を目指している建築士にとっての問題は、こうした二項対立のどちらか一方を選択するという点にあるのではない。社会において個人の人權は尊重されるべきであるが、そのとき、すべての人間関係や空間がドライになるわけではなく、またウェットになるわけでもない。

このように、個人の人權が尊重されることによって、多様で民主的な社会が形成されるが、そこでは、排除よりも包摂が、競争よりも協調が求められる。そのとき、包摂や協調は、単なる妥協につながるものであろうか。

西田はヘーゲル(1770-1831)の弁証法に影響を受けているが、ヘーゲルはカント(1724-1804)の美学に対してつぎのように語っている。

「それは、芸術美の正しい把握の出発点を捉えるものではあるが、真の把握に至るには、カントの欠点を克服し、必然と自由、特殊と普遍、感性と理性の真の統一を、いっそう高い次元でとらえなければなりません。」³⁾

このように、二項対立のどちらか一方を選択するという点ではなく、また足して2で割るとか中間にバランスさせることでもない。西田やヘーゲルが追い求めているように、両者の根底に横たわる普遍性を探求することで、両者が対立を超えて両立する複合的な世界を構築することが、建築物や環境の創造を導くことになると考えられる。

建築設計の条件は多種多様であり、建築士はその条件や課題に対する回答を見出すことが職務ではあるが、個性的な条件による個性的な建築を目指し、社会に話題を提供すれば良いということではない。また、普遍的な建築を追い求めることは、全国画一的な形式に押込めることでもない。

個性的な人間の一生が普遍的な世界を示すことがあるように、差異を超えて普遍性を追い求めている建築士による個性的で特殊解的な建築は、たとえそれが個人住宅であったとしても、新たな建築として、建築の可能性を広げることにつながっていくと考えられる。

5. 瞬間と無限性

西田は、「場所」という論文が掲載された『働くものから見るものへ』を1927年に刊行した後、1930年に『一般者の自覚的体系』を、1932年に『無の自覚的限定』を出版している。そして、『無の自覚的限定』における「私の絶対無の自覚的限定といふもの」と題された論文において、「永遠の今」という概念が登場し、つぎのように西田は語っている。

「我々が或事を想起するといふとき、その事柄は客観的には既に過ぎ去ったものであり、現在にない

ものでなければならぬ。併し出来事とその瞬間瞬間に消え去るものならば、記憶といふものの成立し様はない。そこには一瞬一瞬に消え去ると共に、消え去らざるものがなければならぬ、記憶の底には「永遠の今」といふ如き直覚がなければならぬ。」⁴⁾

消え去るものと消え去らないものとで構成される瞬間において、消え去ることのないものが、「永遠の今」という概念である。そして、「永遠の今」において、現在の一瞬に、過去・未来が引き寄せられている。

一般的に時間は、過去から未来に向かって流れていく1本の直線として考えられている。しかし、我々の生きられた世界は、過去や未来から始まるわけではなく、現在という瞬間から始まる。現在が固定されることによって、過去と未来が登場してくる。つまり、我々は現在を中心として、記憶によって過去を思い出し、想像によって未来を予想している。西田においては、自己のあるところ、そこが現在、今であり、この所である。この所から、その所や彼の所が見られ、現在から過去・未来が見られると考えられている。

過去の出来事にとらわれ過ぎることなく、また未来の夢におぼれることなく、現在のこの瞬間を我々は、前向きに真剣に過ごしていくことが大切である。

そして、「場所」の論理では、すべての概念に対してそれを包摂する概念が考えられ、現在の瞬間に対してそれを包摂する概念は「永遠の今」ということになる。意識の底には永遠に変わらないものがなければならぬと考えられている。

『無の自覚的限定』におさめられている「私と汝」においても、「永遠の今」という概念が重要な役割を果たしており、西田はつぎのように語っている。

「すべて実在的なものは時に於てあると考へられ、時は実在の根本形式と考へられる。内界と考へられるものも、外界と考へられるものも、それが実在的と考へられるかぎり、時の形式に当嵌つたものと考へられねばならぬ。然るに、時は、現在が現在自身を限定するといふことから考へられるのである。而して現在が現在自身を限定するといふことから時が限定せられるといふことは、時は永遠の今の自己限定として考へられると云ふことを意味してゐなければならない。時は永遠の今の自己限定として到る所に消え、到る所に生まれるのである。故に時は各の瞬間に於て永遠の今に接するのである。時は一瞬一瞬に消え、一瞬一瞬に生まれると云つてよい。非連続の連続として時といふものが考へられるのである。」⁵⁾

すべて実在的なものは時に於てあると考えられることにより、時間論がすべての学問の基礎で

あると考えられる。そして時間論は、現在という瞬間である点から始まる。

ところで、数学で定義される点は現実には存在しない。その定義を弛緩させ、点に面積を与えることによって、図に描くことができる。同様に瞬間も定義通りには存在しない。日常の言語表現に登場してくる今や現在には、ある時間的な幅が存在している。我々の日常生活において時間に対する見方は、おおらかである。

しかし、瞬間に対する日常的なおおらかな見方を取り除けば、西田の言うように、瞬間が過去を消し、瞬間から未来が始まると考えられる。つまり、我々の一瞬一瞬が死であるとともに生であり、あらゆる瞬間に、あらゆるものが無へと消え、そしてすべて新しく生み出されると考えられる。

このように時は、非連続の連続と考えられる。そして、西田の言う「純粹経験」は、原理的には瞬間であり点であり、「永遠の今」が限定されたものである。瞬間の永遠性について西田はつぎのように語っている。

「我々は各の瞬間に於て永遠に未来なるもの、永遠に過去なるものに接して居るのである、否、永遠の今に接して居るのである。我々はいつも我々の底に死即生なる絶対面に接して居るのである。」⁶⁾

西田は、人の境涯における無限大の世界だけではなく、時の瞬間にも無限大の世界が同居していると見ている。瞬間は実体をもたない究極の場所であり、すべてを含み、すべてがこの一瞬にまつている。

このことは、我々の弛緩した日常生活への批判と考えることができる。我々はあまりにも時を粗末に扱っているのではないだろうか。そして、それとともに、西田は、情意の生み出す「瞬間的な発想」の重要性とその可能性を見ていると考えられる。芸術家の創作行為においては、一瞬にして無限の深みを見る可能性があると考えられる。

6. 他者と尊厳

ところで、2本の直線の交点は面積を持たない。しかし交点には、2本の直線の情報が流れ込んでいると考えられる。同じように、瞬間には過去と未来からの時の流れの情報が流れ込んでいると考えられる。さらに、瞬間には通時の情報だけではなく、共時の情報も流れ込んでいると考えられる。

そして瞬間という点は、単独に存在しているわけではなく、様々な関係の網目の中に存在している。われわれの捉えどころのない意識の出発点には、あらゆるものが入ってくる。その潜在的な関係性は無限である。つまり、「AはAである」という主語のA（自我）は、日々刻々と変化し無常であり、同時

に、様々な関係のもたらす様々な情報に影響を受けていると考えられる。

ところで、昨日の生活と今日の生活、昨日の自分と今日の自分を見比べると、詳細に観察をすれば多くの差異が見られるにもかかわらず、我々は、昨日の自分と今日の自分は同一であり、普段と変わらない日常生活を繰り返していると考えている。しかし、厳密なる知性を用いて、この同一性を疑い始め、昨日のAと今日のAとは別人である、あるいは昨日のBと今日のBとは別人であると確信すると、他者とかわした約束の不履行を許す理屈が登場してくる可能性がある。知性をあまりに厳密に使用しすぎると、袋小路に陥ってしまう。そこで、我々には、同一性を感じさらに信じるという感情と意志が必要になってくると考えられる。

知情意に基づく人間関係はとても繊細であり、永遠に変わらないということではなく、各人の心の状態によって様々に変化する。そして、良好な人間関係を維持し発展させようとするとき、知性だけではなく感情や意志も重要な役割を果たすと考えられる。

社会を構成する人間関係の基本である私と汝の関係について、西田はつぎのように語っている。

「私と汝とは以上述べた如き意味に於て、永遠の今の自己限定として、即ち働くものとして、共に永遠の今に於てあるのである。永遠の今の自己限定といふものを一般者の自己限定と考へれば、我々はその外延として之に於てあると云ふことができる。我々は各自の内的世界に於てあり、所謂外界を通じて相働くのではなく、同じ一般者によつて限定せられ、同じ一般者に於てあるものとして相関係するのである。色は色と相関係するが色は音と相関係せない、私と汝と互いに人格として相働くにも、同一の一般者に於てあるといふ意味がなければならぬ。」⁷⁾

私にとって汝は、単に利用すべき対象ということではない。「永遠の今」という同じ一般者においてあるものとして相関係するものであり、西田はつぎのように語っている。

「絶対の死即生といふことは、唯、ノエマ的に一つのもので死即生であると云ふのではない、又、過程的に否定が即絶対の肯定であると云ふのでもない、自己が絶対に他なるものと一であると云ふことでなければならぬ、自己の中に絶対の他を見、絶対の他の中に自己を見ると云ふことでなければならぬ。」⁸⁾

西田にとって、生きられた社会を構成している人間関係とは、相互に争うものでも、相手を利用するものでもない。また、互いに反感を覚えるものでも、相互に共感するというものでもない。自分自身の心を深く掘りさげたとき、そこは、あらゆるもの

が許容される無限大の世界であり、絶対に他なるものの世界でもある。西田は、平等と人間生命の尊厳に根ざした、他者の絶対的尊重という人類共通の倫理を重視していると考えられる。

歴史や世界において登場してきた様々な文化の差異を超えて、他者の文化を積極的に認めようとしたときに、普遍的な文化の基軸として、瞬間に同居している「永遠の今」を見ることは、原理主義や排他主義に走る人間の傾向性を、他者尊重の重視から否定しているものとも考えられる。健全な人間社会の建設のためには、人間の自由と平等と尊厳に根ざした精神が不可欠である。

7. カオスと芸術

文章は、単語と統辞法や修辞法から構成される。多くの単語のなかから適切な単語を選び、それらを接続していくことによって様々な文章が成立する。建築における意匠設計もこうした文章の作成に準じて考えることができる。単語としては、壁や窓などの形態、部屋、マッス（量塊）などが考えられる。たとえば、付け書院・床・違い棚・帳台構えが規則に則って配置された座敷を建物の主要部に置くと、書院造という伝統的な日本住宅となる。そして、この室内空間は、封建社会における対面という儀式がとり行われた場所であった。

建築設計の意図を説明するとき、建物の構造・設備など技術的な説明、そして機能的な説明以外に意匠の説明として、言語学的に説明することができる。設計された空間を「ドライーウェット」という二項対立で記述することもその一例である。

言語学的な説明は、建物と歴史や周辺環境との関係を説明するときにも使用することができる。歴史や周辺環境に対して、そうした既存の文脈に合わせるのか、あるいはズレを持ち込むのかは、建築士にとっても一般の人々にとっても重要な問題であると考えられる。

建築の設計は、歴史や周辺環境との対話であると言える。しかし、歴史法則や合理的な理性に従えば良いというものではない。というのは、合目的性や因果関係によって歴史が必然的に進行するわけではないからである。歴史には目的があるか、また、歴史法則が存在するかについては、見解の分かれるところである。我々の生活には様々な偶然も登場してくるし、我々の価値創造の活動による飛躍的な発展も重要である。

「住宅は芸術である」という発言とともに、日本の伝統への探求から仕事を始めた篠原一男は、晩年つぎのようにカオスの美に注目している。

「数学から建築に転攻した50年代初めは、私は日本建築伝統を主題として研究と設計作業に入って

いた。戦後日本建築の主流になっていたアメリカ経由のモダニズムを私は追うことはなかったが、空間認識と表現についての彼の記述は、日本伝統の思考構造を分析するときに、反射鏡面になった。そして、60年代初めは混乱の様相をもった空間事物系を取り扱う一般論理はまだ現れていなかったから、私の「混乱の美」は同時代精神としての論理の支援はなかった。しかし幸いに、70年代半ばに形成が始まり80年代末には専門外のわれわれまで情報が届くようになったカオス・ロジックによって、私の混乱の美というコンセプトは同時代連立をする科学があったことを知った。素粒子の振舞いは、それまでの物理の理論と矛盾した。論理そのものの組み替えて素粒子物理を出発させ、大きな飛躍をつくった。近代科学それ自身に内蔵されている論理飛躍のメカニズムである。「超大数集合都市」は私の現実の住宅設計と言説の都市論の相反二極を結んだ(紐構造)が捉えた。」⁹⁾

篠原の言うように、多様な生活を包含し、多彩な価値を生み出す現代都市においては、単一の価値観によって支配されている都市の風景を見ることはできない。そして、この篠原の現代都市におけるカオス礼賛の背後にはつぎのような考え方がある。

「孤独は雑踏のなかにある」と書いた哲学者(三木清)の言葉を私は思い出す。まだ数学を専攻していた半世紀以上も前の記憶である。そのとき私が見ていた雑踏は、今日のそれよりはるかに素朴な風景だったが、しかし、彼の言葉が乗る文脈を理解した。今、東京の夕刻、どこかの気心の知れた店でくつろぐというような日本的スタイルが必要なく、いつも外国の街を歩くような視線と速度で私は横断する。そして〈自由な孤独〉という都市快楽の主断面と次つぎに出会う。」¹⁰⁾

物の豊かさ以上に心の豊かさや美しさが求められているが、それは心地よい人間関係が社会には必要であるからである。その心地よい人間関係は社交という小手先の技術から登場する世界ではなく、他者尊重の精神から生み出されるものであると考えられる。自身の根底に絶対の他者が住んでいるという西田の主張に比べ、篠原の都市生活者における孤独への礼賛は、別世界のように思われる。

さらに、特別な意味や理由もなく生成し、転移によって発生した都市のカオスへの無批判の礼賛は、単なる状況の追認であるというそしりをまぬがれないと考えられる。篠原の志向した伝統と芸術の世界はどこを目指しているのか不明のままである。

8. 結論

芸術は、道楽や暇つぶしではない。ましてや、人々の虚栄心を満足させるためにあるものでもない。日

常性の中に埋没していない瞬間的な生命の輝きなど、瞬間を永遠に高める力を芸術は持っている。この時、この一瞬しかない価値を永遠の美へと昇華させる力を芸術は持っている。

さらに、個性が普遍性を歌いあげる芸術には、国境はない。差異を超えて人と人の心を結び、異なる文化を結ぶ力を芸術は持っている。

人類の平和と文化のために、合理的な理性や歴史法則は大切である。しかしそれ以上に、我々の意識に登場する無限大の円や瞬間に、すべてのものが包摂されるということの方が重要である。個人の尊厳はすべての価値に優先する。

また、成熟した市民社会の価値観を重視し発展させるためにも、我々は、他者の文化を積極的に認め、誰もが排除されない、相互の尊敬と信頼に貫かれている持続可能な社会を築く必要がある。権威的な力に支配されることなく、自由に交流し発展できる共生の世界をめざすことが大切である。

民族の差異を超え、人間を阻害し迫害する勢力と徹底して戦うこと。非暴力による平和の戦い。さらに、異なる思想に学び、そこに人間の共通の倫理を探る普遍的なヒューマニズムを育む必要がある。

気候変動などの環境問題をはじめとして、貧困や紛争、人権など、多岐にわたる地球規模の困難な課題の解決に際して、西田の哲学の積極的な理解から登場する文化としての建築創作論は、建築士による有効な活動の推進力になると考えられる。

- 1) 西田幾多郎:西田幾多郎全集第三巻、岩波書店、東京(2003)、p.499
- 2) 多木浩二:ことばのない思考、田畑書店、東京(1972)、pp.105-106
- 3) ヘーゲル、長谷川宏訳:美学講義上巻、作品社、東京(1995)、p.66
- 4) 西田幾多郎:西田幾多郎全集第五巻、岩波書店、東京(2002)、pp.103-104
- 5) 西田幾多郎:前掲書、pp.267-268
- 6) 西田幾多郎:前掲書、pp.282-283
- 7) 西田幾多郎:前掲書、p.288
- 8) 西田幾多郎:前掲書、p.295
- 9) 篠原一男:超大数集合都市へ、A.D.A.EDITA Tokyo Co.、東京(2001)、pp.142-143
- 10) 篠原一男:前掲書、pp.116-117